

6. Elastase-I (RIA 法) の臨床的意義

中野 哲	北村 公男	綿引 元
武田 功	小沢 洋	熊田 卓
浜野 博次	杉山 恵一	(大垣市民・二内)
金森 勇雄	松尾 定雄	樋口ちづ子
川地 俊明	市川 秀男	安田 鋭介
木村 得次	(同・特殊放センター)	
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

ヒト唾液から精製され、RIA法による測定が可能になった Elastase-I の臨床的意義について検討した。

健康人 52 名を対照とし、各種消化器疾患患者 221 名について血中 Elastase-I を測定し、従来の膵酵素 amylase, lipase, trypsin 値と対比、検討し、また急性膵炎、慢性再発性膵炎の経過を、この 4 つの酵素の変動でみた。一方、PS 試験における十二指腸液中のこれら 4 つの酵素の変動も観察した。

健康者における血中 Elastase-I は、男性の方が高値を示したが、年齢差は明確ではなかった。MV $\pm$ SD は 142.0 $\pm$ 69.4 ng/dl であった。

他の血中膵酵素との対比でみると、trypsin と最も関連し、(r=0.670 n=103 p<0.05)、膵障害の経時的変動をみても、amylase に比し本酵素 trypsin 等がより高値で、しかも異常上昇時間が長かった。また、唾液中の酵素分泌パターンを本酵素は最も忠実に反映していると思われた。

7. DCC によるガストリン RIA の基礎的検討

小川 真美	金子 昌生	(浜松医大・放)
真坂美智子	(同・二内)	

(目的) ガストリンは、胃酸分泌を調節するペプチドホルモンとして知られているが、今回、私達はガストリンのルーチン化にあたり、ミドリ十字社ガストリン I-125 キットを検討し、若干の知見を得たので報告する。

(結果および考察) 測定方法は、使用説明書に準じたが、反応時間を 72 時間とし、DCC 添加後 20 分間放置とした。標準曲線、同時再現性、日差変動、いずれも C.V. 10% 以内と良好であった。希釈試験、添加回収試験の成績では、いずれにおいても DCC 添加直前にタンパク補正を行うことによって、満足すべき結果が得られた。ただし 6.3 g/dl 以下の総タンパク量では、測定値は高く測

定される傾向がみられた。特にその変動は、グロブリン濃度により大きく依存しているという結果を得た。

健康成人男女 47 例の平均値は、36.4 $\pm$ 19.4 pg/ml (mean $\pm$ 1 S.D.) であった。

これらの結果から、DCC を B-F 分離剤とする本キットでは、正確な値を得るために、チューブ当りのタンパク濃度を均一にすることが、特に重要であると思われた。

8. 125 I-labelled progesterone RIA kit (CIS 製) の使用経験

浅野 智子	山田 祥代	河合 恭嗣
江尻 和隆	(名保衛大・放)	

CIS 社より開発された Progesterone kit の基礎的検討を行った。

Intraassay 5.2~12.2%, interassay は、8.2~13.6% であり、また標準曲線の再現性も、良好であった。回収率は、86.7~126.1% となり、低濃度部で多めに回収された。希釈試験の結果も良好であり、妊婦のような高濃度領域の検体も、十分測定可能であった。第一インキュベーション時間は 30~40 分、第二インキュベーション時間は 2~3 時間が適当であった。第一ラジオアイソトープ研究所の Progesterone kit との相関は、 $y=0.81x+0.914$ 、相関係数 0.885 であったが、第一のキットの方が、やや高めであった。

本キットを用いて測定した正常月経周期における血中 Progesterone 値は、月経期 0.33 $\pm$ 0.062、卵胞期 0.36 $\pm$ 0.16、黄体期 8.21 $\pm$ 3.48 ng/ml であった。

9. New England Nuclear 社 kit による血中 β -Endorphin の測定

橋本 琢磨	西部万千子	松原 藤継
		(金大・検査)
沢井 武	(沢井医院)	

(目的) 最近 New England Nuclear 社 (第 1 化学薬品) より β -Endorphin の RIA kit が市販されるようになった。われわれはこの kit に関し基礎的検討を行い、健康人における血中 immunoreactive β -Endorphin の濃度および各種薬剤に対する変動を探索した。

(方法) 健康人 20 名は医学部学生 (平均年齢 20.5 歳、男